

【表現学関連分野の研究動向】

認知言語学

南 佑亮

近年、認知言語学の研究パラダイム内において、理論・方法論の見直しと新たな可能性を探求する動きが盛んであるが、2023年もその傾向を象徴する著作・文献が国内外で多数出版された。以下では、その一部を取り上げる。

まずは、『認知意味論を目指してI/II』(岩田彩志・菊田千春・西山淳子監訳、開拓社)と『フレーム意味論とフレームネット』(藤井聖子・内田諭、研究社)の二点を挙げるべきであろう。前者は認知言語学の創始者の一人Leonard Talmyによる1970年代から約30年の研究の集大成 *Toward Cognitive Semantics*(全2巻)のvol. 1の全面翻訳(二分冊)である。後者はフレーム意味論とフレームネットについて、辞書作成・語学教育・自然言語処理への応用に関する解説も含めた概説書である。認知言語学において重要な位置を占める二つの意味論の全体像について日本語で読める書籍が世に出たことの意義はきわめて大きい。

次に、学際的視点から新たな研究領域の開拓を試みたものとして『小説の描写と技巧—言葉への認知的アプローチ』(山梨正明、ひつじ書房)と『プラグマティズム言語学序説—意味の構築とその発生』(山中司・神原一帆、ひつじ書房)の二冊を挙げておきたい。前者は、散文芸術である文学テキストにおける描写の技巧が様々な認知プロセスに動機付けられたものであることを豊富な実例と共に示しながら、認知言語学と文学研究との有機的接点を探るといふ、意欲的な著作である。後者は、従来の言語研究には欠けていたプラグマティズムという思考の枠組みを導入し、意味のマルチモーダル性(身体性)、フレーム理論、記号論、ネオサイバネティクス、第二言語習得という新旧の様々な研究分野の知見を統合することの意義を論じた、挑戦的な一冊である。

AI技術と言語学の関係についての著作が国内外で出版されたことも特筆に値する。『AI時代に言語学の存在の意味はあるのか?—認知文法の思考法』(町田章、ひつじ書房)は、「理論言語学者や語学教師は近年急速な進歩を遂げているChatGPTなどの生成AI技術といかに向き合うべきか」という問いと真剣に格闘した、啓発と提言の書である。一方、*Copilots for Linguists* (Tiago Timponi Torrent, Thomas Hoffmann, Arthur Lorenzi Almeida, and Mark Turner, Cambridge University Press) は、将来的に言語学者が機械学習に基づく生成AIツールを助手(assistant)として利用しながら構文文法的な言語分析を進めていく可能性を詳細に検討したものであり、同書自体が町田氏の投げかける問いへの一つの解答となっている点で興味深い。

構文文法(Construction Grammar)関連では、オンラインジャーナル *Constructions* の特集号“35 Years of Constructions” および *Cambridge Elements in Construction Grammar* シリーズの一連の著作(上述の *Copilots for Linguists* を含む)が立て続けに発刊された。いずれにおいても中堅・若手研究者による論考が際立っている。今後のさらなる進展に注目したい。

(神戸大学)